

慶谷壽信先生の学問などについて (7)

—有坂学 2、切韻の基礎方言—

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することにしました。

\* \* \* \* \*

吉池：慶谷先生は、有坂秀世の学問は「日進月歩」であったと評していたわけですが、前回より、この日進月歩と評した慶谷先生の視点をとおして、有坂秀世の学問について話し合うことにしました。慶谷先生が日進月歩の例として挙げたものは次の四点です。前回は①をとりあげました。今回は②切韻の基礎方言をとりあげることになります。

- ①拗音説 (=重紐論)
- ②切韻の基礎方言
- ③vowel-gradationノ法則
- ④『音韻論』

中村：切韻という書物は、音韻の規範について、南北の諸学者が集まって相談した結果をまとめあげ、隋の仁寿元年(601年)公にしたものですね。まずはこの韻書の基礎となる言語をめぐる有坂氏の論について、慶谷先生はどの点を「日進月歩」と評したのか、いま一度確認をしたいのですが。

吉池：慶谷先生が「日進月歩」とした論文は以下の二つです。

・1988年「有坂秀世「音韻論」(『音聲の研究』第VI輯)の成立に関する卑見」東京都立大学『人文学報』198:97-142。(『有坂秀世研究—人と学問—』338による)

また、昭和7、8年ごろに書かれた『上代音韻攷』では、切韻の基礎となった言語は、隋代長安音とされていたが、「隋代の支那方言」(『方言』第六卷・第一号、昭和11年1月)では、「河南省地方の言語を基礎とする北方標準音」と訂正された。

・1989年「著書未収録の既発表論文について」『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』有坂愛彦、慶谷壽信編、三省堂：3-7。

『上代音韻攷』の原稿は、言語誌叢刊の一つに予定されていたといわれるが、当時これが公刊されなかったことを、私は有坂氏の名誉のために喜ぶ。もし公刊されていたならば、有坂氏は、学説の修正に追いまくられたことであろう。一例を挙げれば、河野六郎氏の指摘するように、「隋代の支那方言」と『上代音韻攷』の当該部分とでは、大きな開きがある。旧稿を修正しながら、すこしずつ発表していったとしても、「カールグレン氏の拗音説を評す」のように、『國語音韻史の研究』で修正を要するほど、「日進月歩」の有坂氏であった。(6頁)

中村：慶谷（1988）は「隋代の支那方言」で「河南省地方の言語を基礎とする北方標準音」に訂正したとします。この「北方標準音」ですが、李思敬著『音韻のはなし』（慶谷壽信・佐藤進編訳。光生館、1987年）の「《切韻》音系の性質」の注では「隋代の支那方言」を洛陽音説として紹介していますから、別の言い方をすれば、長安音説から洛陽音説に訂正したと理解することができます。なお、李思敬著『音韻のはなし』の訳者注によって切韻の基礎方言に関する諸説をまとめると次のようになります。

(a) 長安音説

- ・Bernhard Karlgren(1954) *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese*.
- ・周法高（1948）「玄應反切考」。

\*ここで周法高の説の変遷を紹介する。周法高（1968）「玄應反切考」（『中國語言學論文集』）では長安の士大夫階級の読書音とし、周法高（1968）「論切韻音」では、金陵や洛陽や長安を問わない士大夫階級の共通読書音とする。

(b) 洛陽音説

- ・有坂秀世（1936）「隋代の支那方言」
- ・陳寅恪（1936）「東晉南朝之吳語」
- ・陳寅恪（1949）「從史實論切韻」

(c) 書面言語説

- ・王力『漢語史稿（修訂本）上冊』
- ・周祖謨（1966）「切韻的性質和它的音系基礎」

中村：ところで、ひとつ気になるのですが、(a)の長安音説の部分に、有坂秀世の『上代音韻攷』を入れてもよさそうなものを、そのようにしなかったのは有坂氏逝去後に出版された遺稿であったからでしょうね。

吉池：そうだとおもいます。『上代音韻攷』（1932～1933年著。出版は1955年）が有坂秀世の遺稿であり、“説”として本人には社会的な責任がないということを考慮したためでしょう。先にあげた慶谷（1989）にはつぎのようにあります。

『上代音韻攷』の原稿は、言語誌叢刊の一つに予定されていたといわれるが、当時こ

れが公刊されなかったことを、私は有坂氏の名誉のために喜ぶ。もし公刊されていたならば、有坂氏は、学説の修正に追まわられたことであろう。

さらに同論文の続きにつきのようにあります。

『上代音韻攷』と『語勢沿革研究』とが、歿後、有坂氏の意志とは関係なく、というよりは、おそらく意志に反して公刊されたことは、考えられるただ一つの形であった、と私は考える。この両書の内容について、有坂氏は対社会的な責任をもっていないのである。

もっともこのような扱いは、水谷眞成（1961）「陸法言「切韻」」（『倉石博士還暦記念中國の名著—その鑑賞と批評』。『中國語史研究—中國語學とインド學との接點—』三省堂、水谷眞成著所収による。1994年、pp. 177-182）以来のものではありませんが。

中村：どういうことでしょうか。

吉池：慶谷先生の学問上の師匠である水谷眞成氏の水谷（1961）の「三「切韻」における問題」に切韻の言語に言及した部分があります。内容の一部をまとめるとつぎのようになります。

- ・長安音と見る説（カールグレン、周法高等）
- ・文學言語の語音體系と唱える人（王力「漢語史稿」）
- ・洛陽を基礎とし其の他の方言をいくらか取り入れてあるとする説（有坂秀世、陳寅恪）

長安音説に有坂秀世の『上代音韻攷』（出版は1955年）を含めません。社会的責任のないものを“説”として提示すべきではないという考えによるのでしょうか。もっとも、「カールグレン、周法高等」の「等」という表現をもちいて有坂秀世に言及しているのかもしれませんが、そのあたりはよくわかりません。なお、これは想像にすぎませんが李思敬著『音韻のはなし』の訳者注は、水谷（1961）を土台にしているのではないのでしょうか。

中村：いま一つ李思敬著『音韻のはなし』の訳者注で気になる部分があります。長安音説としてカールグレン（Karlgren）を挙げるのはよいとして、どうして1954年の *Compendium* なのかという点です。というのも、有坂秀世の『上代音韻攷』は、カールグレンの *Philology and Ancient China* 1926 を長安音説の文献として原文を引用して紹介しています。

吉池：たしかに『上代音韻攷』は *Philology and Ancient China* 1926 を長安音説の文献として原文を引用し紹介しています。さらに『上代音韻攷』は「なほ、Analytic Dictionary 總論十六頁にも、略同趣意の説が出てある。」とします。Analytic Dictionary は *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*. 1923. のことですが、その16頁には直接に長安音に言及する部分はなく、総論の4頁において切韻の基礎方言が長安音であることを明

示します。該当する部分を引用しましょう<sup>1</sup>。

4 頁 Through the study of old dictionaries arranged according to rimes, *fan-ts'ie*-spellings, old rime tables, ancient transcriptions of foreign words and above all a comparative study of the dialects it has been possible to determine in its essential features the pronunciation of the language embedded in the dictionary *Ts'ie jün* written by Lu Fa-ien and published 601 A.D., the North-Chinese language spoken in T̄sang-an 【長安に相当。原文では T̄s̄ と ang の間に半角の空きがある。氣息を表す ' が欠落したのであろう：吉池】 during the Suei and the beginning of the T'ang dynasties (3).

したがって、研究史という観点のみから紹介するならば、長安音説としては 1954 年の *Compendium* ではなく、1923 年の *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese* をあげるべきでしょう。(c) の書面言語説としても、王力の『漢語史稿（修訂本）上冊』ではなく、修訂前の『漢語史稿上冊』をあげるべきだということになりますが、そのようにはなってはいません<sup>2</sup>。*Compendium* や『漢語史稿（修訂本）上冊』をあげた事情について、いくつか思いあたることもあるのですが、ここでは事実のみを指摘しておきます。

中村：いずれにしても、いま我々にできることは、『上代音韻攷』（1932～1933 年）と「隋代の支那方言」（1936 年）を確認するということでしょうか。

吉池：はい、その前に『上代音韻攷』の前提となるカールグレンの考えを確認しておきたいとおもいます。こういうことでしょうか。現代諸方言と切韻を比較すると、現代方言音の多くが切韻から発展してきたとして説明できる。そうであるからには、切韻に示されるような言語音が全土に広がったときがあるはずである。そのようなときは、統一国家をつくりあげ広範囲に文化的な影響を及ぼした隋唐代であり、言語はその都であった長安音にちがいない。

中村：カールグレンは、かつてヨーロッパにギリシア語がコイネーとして広がったように、唐代長安音が広範囲に広がったと考えているようですね。もっとも、『上代音韻攷』での有坂秀世の考えは、じわじわと長安音が全土に広がったという意味でのコイネー説には批判的で、長安音は先ず主要都市に移植され、その後は独自に発展して今日に至ったと考えているようです。

---

<sup>1</sup> 1973 年の複製本による。“CH'ENG-WEN PUBLISHING COMPANY TAIPEI 1973” とある。

<sup>2</sup> 『漢語史稿上冊』（科学出版社、1957 年）には「它只代表一種文學語言的語音系統」とあり『漢語史稿（修訂本）上冊』（中華書局、1980 年）には「它只代表一種被認為文學語言的語音系統」とある。

吉池：有坂秀世の考えについては『上代音韻攷』の204頁から205頁にかけて次のよう  
にあります。「切韻著作の動機は、音韻の正訛を判別して標準音を確定する目的から出たので  
あつて、当時の長安音をそのまま記述するのが目的ではなかつた。それは法言・劉臻等が  
音韻を論じた際に、諸方言や古今の字書を引合ひに出してゐることによつても分るし、殊  
に南北の是非、古今の通塞を論ずとあることによつて明かである。勿論、何を標準音に定  
めるかといへば、都を雅なりとし田舎を卑なりとするのが人情であるから、自然当時の長  
安に於ける教養ある人々の言語が基礎になつたことであらうが、常に唯長安音のみが採ら  
れてゐたかどうかは保証し難い。」とし、ついで、長安方言で同音となっているが他方言で  
区別する場合、区別を採用することも有り得るとします。そして「もし有り得るとすれば、  
切韻の反切及び韻目は、当時の長安音よりも一層古い時代の區別を包含することとなり、  
さればこそ現代支那諸方言の大部分が切韻の音から導かれ得るやうに見えるのかも知れな  
い。」とします。最後に「ただ切韻の性質が前に述べたやうなものであつたとすれば、自然  
当時の長安音がその最も主要な基礎になつてゐることだけは認めてよからう。即ち切韻の  
あらず音は、いくらか修正され理想化された隋代長安音と見てよいであらうと思ふ。」と  
結論しています。

これによりますと、なにか具体的な論拠があるのではなく、当時の都が長安であるから  
標準音を定めるのであるならば長安音を主要な音として採用したはずであるという常識的  
な想定によつたようにみえます。この点について、「隋代の支那方言」(1936)になると論  
調が変わっていきます。

中村：そうですね。『上代音韻攷』(1932～1933年)では「当時の長安音がその最も主要な  
基礎になつてゐることだけは認めてよからう。」という立場であつたのが、「隋代の支那方  
言」(1936年)では「切韻は隋代に於て天下の標準音を示すために作られたものであるから、  
その基礎となつた言語を、当時の首都たりし長安の方言と見ることも、一理は無いでもな  
い。併しながら、私はこの点についてはいささか疑を持つて居る。」として軌道修正をし  
ます。そして当時の標準とすべき音が金陵(南京)と洛下(洛陽)であるという顔之推の『顔  
氏家訓』「音辞篇」の記述や、切韻序で江東(≒南京)と河北(≒鄴)に注目していること  
など、いくつかの資料から言語状況や社会情勢を検討した結果、「之を要するに、切韻の音  
韻組織の基礎となつたものは、あくまで河南省地方の言語を基礎とする北方標準語でな  
ければならない。併し、北方標準語そのままではなく、その上に南方標準語の要素が若干加  
味されたものである。」と結論づけています。

吉池：切韻という書物は中国語の中古音の中心資料ですから、これがどのような言語を表  
すか、ということは大きな問題であり、さまざまな説があるわけですが、この点について、  
中村さんはどのようにお考えですか。

中村：ひとことで言えば、やはり切韻の体系は編者たちの理想とした読書音の体系ということになるのではないのでしょうか。

吉池：“理想とした読書音”とはどういうことでしょうか。

中村：士大夫階級の子弟たちは幼い頃から経書や史書を音読する習慣を身につけていたはずですが、そのような読書音は洛陽であろうが金陵であろうが大きな差異はなかったのではないかと思います。いずれの地域でも正しい音で読むという意識が働いていたことは想像に難くありません。それでもなお、若干部分において地方ごとに発音の癖があったために、陸法言の家に学者たちが集まった際に正音に関する議論をし、後に切韻としてまとめたわけです。その経緯から考えても、切韻の体系は理想とすべき読書音ということになるはずですが。この考えは上に挙げられた周法高（1968）「論切韻音」の説とほぼ同じということになります。とはいえ、そのような読書音はつまるどころ、北方標準語を基礎とし南方標準語をも参考にしたという有坂氏の想定と大きく離れるものではないということになります。

吉池：長安音説から洛陽音基礎説への有坂氏の修正は妥当であったということでしょうか。

中村：そういうことになるでしょうが、慶谷先生が『上代音韻攷』の原稿は、言語誌叢刊の一つに予定されていたといわれるが、当時これが公刊されなかったことを、私は有坂氏の名誉のために喜ぶ。もし公刊されていたならば、有坂氏は、学説の修正に追いまわられたことであろう。（「著書未収録の既発表論文について」1989年）と述べたほど、有坂氏の旧説が不名誉であるとも思えません。『上代音韻攷』においても「切韻著作の動機は、音韻の正訛を判別して標準音を確定する目的から出たのであつて、当時の長安音をそのまま記述するのが目的ではなかつた。」と明言しているとおり、有坂氏も切韻が理想の読書音（有坂氏の表現では「標準音」）を目指したものと考えていた訳です。ですから、切韻の性格については一貫した考えを持っており、ただ最も影響を与えた読書音（標準語）について、漠然と首都の長安と見なしていた初期段階から、資料の精査によって鄴や洛陽など河南省の標準音へと改めたということです。まさに「日進月歩」の本領発揮と言えるかも知れません。

吉池：鄴や洛陽など河南省の標準音を基礎として切韻が作られたというのが有坂説ということですが、カールグレンの長安音コイネー説とは相容れないものなのではないでしょうか。

中村：カールグレンは、福建省を除くほとんど全ての方言が切韻の体系から発達したと考えました。それほど諸方言の音韻は切韻の体系の枠の中に納まっている訳です。そのよう

な状況が生まれるためには、切韻に近い体系を持った言語が全国に影響を与えたはずであり、そのような言語として長安方言がもっともふさわしいというカールグレンの仮説は論理としては筋が通っています。少なくとも、鄴や洛陽の言語が全国に広まったということを歴史的な事実として想定するのは無理があるでしょう。国内外の学者・僧侶・商人などが隋唐代を通じて長安に集結し、長安が文化の一大発信地であったのは疑いのない所ですから、現代諸方言に最も影響を与えた言語はやはり長安方言ということになるのではないのでしょうか。

吉池：そうしますと、有坂説とカールグレン説をどう整理すべきか、ということですね。

- ①切韻は鄴や洛陽など河南省の標準音を基礎として編纂された。(有坂説)
- ②現代諸方言は長安方言が広まった（もしくは影響を与えた）ものである。(カ氏の説)
- ③現代方言のほとんどは切韻の体系に納まっている。

もしもこの三点がすべて正しいとすれば、次の仮説が成り立ちます。洛陽などの標準音（士大夫階級の読書音）が統一帝国の首都たる長安に移植され、その言語が全国に広まった。このように想定すれば、一応の説明はつきます。

中村：あるいは、周法高（1968）「論切韻音」のように、そもそも洛陽、金陵、長安において、士大夫階級の読書音に大きな差異がなかったという想定も可能です。もちろんその場合でも、隋代以降、洛陽や金陵の読書音が長安の読書音に影響を与えた可能性は大きいでしょう。開皇の初め（580年代）に陸法言の家に諸家が集まって音韻を論じたと切韻序に記されているその家は長安であったと考えられていますから<sup>3</sup>、この一事をもってしても、「鄴・洛陽・金陵」→「長安」→「全国各地」という読書音の伝播が透けて見えるようです。

---

<sup>3</sup> 隋書卷五十八に陸法言の父親陸爽について次のようにある。「及齊滅，周武帝聞其名，與陽休之、袁叔徳等十餘人俱徵入關。諸人多將輜重，爽獨載書數千卷至長安，授宣納上士。」北周の武帝のときに長安に入り宣納上士を授かったことがわかる。